

東日本大震災追悼と復興祈願の集い
「世界に広がる人々のちからのネットワーク—新たな日本社会の再生に向けて」
報告

島 蘭 進

震災支援の集い「世界に広がる人々のちからのネットワーク—新たな日本社会の再生に向けて」は 4 月 14 日、13 時半から 18 時にかけて、東京大学本郷キャンパス弥生講堂で行われた。<http://www.indranet.jp/syuenren/> 埼玉県加須市で避難生活を送る双葉町の方々を招待、昼食は日光で避難所を提供したバングラデッシュのホーシェン氏の作ったお弁当を楽しみ懇談（ありがとう基金によるサポート）。

ポスターセッションでは、バングラデッシュ、トルコ、インドネシア、イラク、ボスニア、パレスチナの人びと、日本の宗教関係者の集まりである宗援連、WCRP 日本委員会などの震災支援活動の展示が行われた。

14 時過ぎから、東大イスラーム地域研究の阿久津正幸氏の司会でホールでのイベントが始まる。東文研長沢教授の主旨説明。バングラデッシュ一等書記官のご挨拶。黙祷。続いてシンポ「新しい地域社会再生の模索」（第 1 部）。まず、宮坂直樹氏（浄土宗総合研究所）、続いて篠原祥哲氏（WCRP）。

2 人の日本の報告者は宗教・宗派の壁を超えた宗教者のヨコの連携による支援について、また宗教者が支援に入りにくい日本の現状について話された。次に日土文化交流会と Kimse Yok Mu の 2 つの機関に関わっているウグル・ユジュール氏が流ちょうな日本語で話す。Kimse Yok Mu は「誰もいないか?」という意味で、1999 年のトルコ大地震で救助者が瓦礫の下に呼びかけた言葉からきている。ユジュール氏はトルコには「苦しい時には離れない」という考えがあり、事実、皆日本を離れなかったこと。日本とトルコの連帯感について。また、日本人の整然たる行動に感銘を受け見習おうとの声が広がっていることなどを語った。

最後にインドネシア日本同好会 (KAJI) の代わりに登壇した青木武信氏 (千葉大) は、インドネシア人は同じ群島国家、海洋国家である日本に親近感があり青木氏も文化的な近さを感じると述べた。「助け合い」を意味するインドネシア語「ゴトンロヨン」を紹介、またイスラームではこれみよがしの善行はよろしくないという教えがあり、相手の気持ちに配慮した支援を尊ぶという。私は日本語の「陰徳」に近いのではないかと感じた。宗教者ならではの心の支援について手を挙げて語りたい方々があつたが、時間の都合でやむをえず打ち切りとなった。

20 分程の休憩。その間に農学部の教員等による放射性物質の拡散や食品の線量評価等についてのポスターが加わり解説付きの短いポスターセッション（第 2 部）。ポスターは全部で 30 パネル、50 枚ぐらいになっただろうか？

後半（第3部）はコンサート。北大スラブ研の家田修教授が司会。演奏に先立ち、まず肥前栄一東大名誉教授が、福島を会場とする大会を避けたことを残念に思い学会を脱退したと被災者への連帯の気持ちを述べる。そして、日本を愛するハンガリーのヴェドレシュ・チャバ氏が自ら作曲した曲をピアノ演奏。日本のメロディーも織り込まれ、心を揺さぶる「震災日本に捧ぐ」等演奏。クラシック、民謡、ジャズなどのジャンルを超えた曲。涙を流す人もいたようだ。チャバ氏は大災害をテーマにした作品が多く現在は芸術都市セントエンドレの教会オルガニスト兼音楽監督でもある。

続いて東京芸術大学TGS弦楽アンサンブル。今年卒業した14人の奏者の見事なハーモニー。チャイコフスキーの弦楽セレナーデ等、心のこもった演奏に長い長い拍手。まずは双葉町の方々を送る。皆さんを東大構内の名所(?)へと案内した前文学部長小松久男氏らと名残惜しい別れとなった。

心温まる半日。コンサートの提案をして下さり、チャバ氏、TGSのボランティア演奏を実現して下さいました家田教授。スタッフとして黒子で働いてくれた東大イスラーム地域研究の若手諸氏。また、WCRP日本委員会、ありがとう基金、パネリストを務めてくれた宮坂さん、篠原さんなど、支援して下さいました日本の関係者に感謝申し上げます。宗援連関係者も数多く参加して下さいました。ポスター作り等に骨を折って下さった魚尾和暎氏にもお礼を申し上げます。このポスターをもとに宗援連の紹介ポスターを作ることも考えたい。

国際的、宗際的、さらにはさまざまな枠を超えて追悼と復興祈願の気持ちを分かち合うこのような集いは、宗援連として積極的に関わっていく意義が大いにあるものと感じた次第です。